

日付:2015年12月6日／聖書:ヨハネによる福音書1:1～5

説教:「光は暗闇の中で輝いている」

この世は、何故キリストの誕生が必要だったのか？それは、この世が余りにも闇に満ちていたから、光が必要であったということであろう。ただ、その光とは何か、光がどう私たちと関係するのか？そして闇とは何か。

先週までエレミヤ書を学んだが、その終わりはユダ国がバビロニア帝国に滅ぼされ、神殿は破壊され、ユダの民の多くが捕囚の民として異国の地バビロンでの生活を余儀なくされた。結局、ユダの民は、暗闇のままに終わるのかと思われたが、しかし実は、連行され、捕囚の民となった人々は、決して異郷の地で希望を、信仰を捨てたのではなかった。信仰の継承が異郷の地であろうと、捕囚の民とされようと、子や孫に、何世代にもわたって信仰は継承されたのである。マタイ福音書2章に出て来る東方から来た「占星術の学者たち」、彼らの国とは、かつてユダの民が捕囚の民として連行されたバビロンの地であろうと言われる。ユダ国が滅び、異郷の地、バビロンへの捕囚の民とされたのは、この福音書の時代からさかのぼると500年以上も経過したことになる。継承された信仰の光は、決して消えることなくユダの民のみならず、バビロンの人々にもキリストの信仰が受け継がれていたということである。

今や、その暗闇の歴史、捕囚の民とされた、暗く、失望に満ちた異国の地から、キリストの誕生が知られるという状況がそこにある。暗闇は、決して暗闇のままではなく、暗闇の中に光は輝いているのである。「輝く」とは、決してじっとしているという意味ではない。神が人となられたとは、そこにアクションがあったということである。「占星術の学者たち」がキリストに出会えたのは、アクションがあったから。旅に出るという行動があったからである。しかし暗闇は、私たちのアクションを止めてしまう力がある。暗闇の中で動くのは、とても怖い。一歩も動けなくするのは「暗闇」である。

この世に「暗闇」はある。私たちのアクションを、行動を止めようとする「暗闇」はある。私たちの暗闇は何か？社会か、人間関係か、それとも病か。しかし、聖書は「人間を照らす光」が、「暗闇の中で輝いている」と、私たちに語られている。この言葉は希望に満ちている。(神谷)